

## 芭蕉句碑

旅する俳人、松尾芭蕉（1644～1694年）は1689年、江戸（現在の東京）から日本の北東北・北陸地方までを156日間の旅をしました。芭蕉は、弟子の河合曾良（1649～1710年）とともに、ほとんどの道りを歩いて旅しました。2人は、芭蕉がとても尊敬していた詩人、西行（1118年～1190年）の足跡をたどり、古い詩で有名になった数々の場所を訪れました。2人の旅は、芭蕉の詩と散文による旅行記「おくのほそ道」（北の奥地へのほそい道）の題材となりました。

芭蕉と曾良は、予定には含まれていなかったこの山中の寺を、7月13日に訪れました。これは、滞在していた近くの町、尾花沢の住人の勧めにしたがったものでした。境内の美しさと静けさに触発されて、芭蕉は蝉の句を詠みました。

閑さや	Such stillness—（なんという閑さか）
岩にしみ入る	The cries of the cicadas（蝉の声が）
蝉の声	Sinks into the rocks（岩にしみ入っていく）

（ドナルド・キーン訳）

この俳句が刻まれた句碑が、芭蕉と曾良の像と並んで、山寺の入り口近くに置かれています。山寺の上流部の道には、せみ塚という別の碑があります。

『おくのほそ道』は、芭蕉の最後の作品で、最も知られているものです。蝉の俳句は、芭蕉の最も有名な詩で、全国の学校で教えられています。山寺駅から歩いてすぐの場所にある山寺芭蕉記念館では、芭蕉の人生や作品に関する展示を見ることができます。